自己と他者の調整における文化の共通性と差異

日本, 中国, 韓国, 台湾, およびアメリカの大学生の比較

○平井美佳

(横浜市立大学国際総合科学部)

キーワード: 自己と他者の調整, 大学生, 文化比較

Cross-cultural comparison of negotiation between selves and others among young adults

Mika HIRAI

(International College of Arts and Sciences, Yokohama City University)

Key Words: Negotiation between selves and others, young adult, cultural comparison

目 的

自己と他者の要求が葛藤する場合に, 人々はともに重要な両者について状況に応じたバランスを取ると考えられる。平井 (2000, 2006) は, 日本の大学生を対象としたジレンマ場面を用いた面接調査により, 葛藤の相手および問題の深刻度というジレンマ場面の要因に応じて, 人々が自己と他者の調整を行うことを明らかにしてきた。この研究の背景には, いわゆる個人主義・集団主義 (Triandis, 1995) や文化的自己観 (Markus & Kitayama, 1991) の理論が問題とする自己の文化差についての指摘があった。すなわち, 集団主義的あるいは相互協調的な文化に暮らすとされる日本の大学生が, 状況に応じてどのような自己と他者の調整を行うかに注目したものであった。結果として, 人々は自分にとって重要な場面では自己の要求を主張したり, 葛藤の相手と交渉したりする傾向が明らかとなった。このような自己と他者の調整, 特に, 状況に応じた自己の要求についての主張はセルフ・アサーションの概念とも関わり, 社会的適応において重要な役割を果たすと考えられる。また, 状況に応じた自己と他者の調整を明らかにすることで, 文化と自己の相互構成的な過程を検討することが可能となると考えられる。しかし, これまでは直接的な文化比較は行われてこなかった。

そこで, 本研究では, 日本, 中国, 韓国, 台湾, およびアメリカの大学生を対象として, ジレンマ場面における自己と他者の調整における文化間の共通性と差異について検討することを目的とした。ここでは特に, 場面の状況に応じた自己優先的な傾向について文化比較を行う。仮説として, どの文化においても共通して, 自己にとって重要な場面において自己優先的な傾向が見出されると予測した。

方 法

【調査協力者】 大学生の日本人 (横浜) 424 名 (女性 282 名 男性 142 名), 中国人 (北京と南京) 212 名 (女性 108 名 男性 104 名), 韓国人 (ソウル) 261 名 (女性 162 名 男性 99 名), 台湾人 (花蓮県) 195 名 (女性 107 名・男性 88 名), アメリカ人 (Milwaukee) 108 名 (女性 93 名 男性 15 名) の計 1200 名。年齢は 17~29 歳であった。

【調査内容】 質問紙調査を実施した。予備調査を繰り返して, 調査に用いる場面や項目を作成した。最終的に, 自己と他者の要求が葛藤する 6 場面 (2 場面ずつ深刻度が異なる: レベル 1 「ランチ」「テレビ」, レベル 2 「レポート」「試験」, レベル 3 「就職」「結婚」) を提示し, 各場面において, 葛藤の相手が「家族」と「友人」の場合についてそれぞれ「もし私だったらどうするか」について尋ねた。回答項目は, 上述の先行研究においてプロトコル分析に用いられた 5 つのコード (S: 自己優先的, S': 他者に配慮しつつも自己優先的, B: 自己と他者に同程度に配慮, O': 自己に配慮しつつも他者優先的, O: 他者優先的) に該当する内容を場面

ごとに等質となるように作成した。各場面における回答は, 項目内容が自己優先的な程度が強いほど加点して合計し, 各場面の「Self 得点」として得点化した。なお, 回答者にとっての深刻度を確認するために, 「どうしたらいいか困ってしまう」程度についても尋ねた。他に属性や心理的適応等についても回答を求めた。

結 果 と 考 察

1. 場面の妥当性の確認

分析の前に, 場面の妥当性について 6 場面の深刻度の評価について検討したところ, 場面の相手や性別によって差異が見出された部分もあったが, 少なくとも各レベルの全体的な平均値はすべての国においてレベル 1 → 2 → 3 と深刻度評価が高くなり, ほぼ計画どおりであったことが確認された。

2. 深刻度による Self 得点の差異

場面の深刻度別の Self 得点は, Figure 1 に示したように, いずれの文化においてもレベル 1 の得点が最も低かった。多重比較の結果, アメリカのレベル 2 と 3 を除いていずれの間にも有意な差が見出されたことから, すべての文化でより深刻な場面において自己優先的な傾向が高いことが示された。ただし, 中国と台湾では, レベル 3 よりもレベル 2 において S 得点が高く, 就職や結婚よりも勉強に関係した場面 (試験やレポート) において自己を優先させることが示唆された。

Figure 1 深刻度 (レベル 1~3) による Self 得点

2. 葛藤の相手による Self 得点の差異

場面の相手別には, レベルの要因を込みにした場合には, 日本を除く全ての国で有意な差が見出され, 日本では全体の平均値は家族と友人との間で差がなかったのに対し, 他国では家族よりも友人に対してより自己優先的であることが明らかとなった。

文 献

平井美佳. (2006) .自己-他者間の葛藤における調整—“個人主義・集団主義”概念の再検討— 風間書房.